説教20200830フィリピ４：１０‐１４ 　Ⅱ196　　291　21-536

説教　「思いはあっても」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

それにしても、あなた方は、よく私と苦しみを共にしてくれました。この言葉をこの通り、今のあなた方にお送りしたいと思います。それは、いい加減な思いや、へつらいの念で言うのではなく、私が、将に今そう思えるからです。

もうこれで今日の説教を終えてもよいくらいですが、そうもいきませんので続けたいと思います。近頃のわたしの生活パターンは、週の初めは何とも言えない不安感と自己嫌悪、人間不信にさいなまれつつ暮らします。しかし、週の半ばになるとそういう状態は決まって改善して、又次の主日に向けての準備に取り掛かるのです。その週初めの状態は、今日読まれました招きの言葉に近いかも知れません。激しい苦しみに襲われている。人は必ずあざむく、ああ不安だ。或いは、アブラムが満天の星を仰ぎつつ、その信仰を主から義と認められたその夜に、深い眠りに襲われ、恐ろしい大いなる暗黒に襲われた時のようでもあります。

又、ありていに言いますれば、お前は説教では偉そうなことを言いながら、それを全く実行できていないではないかと責められる声を聞くこともあります。

これらのことを今冷静に振り返ってみますと、ただ私が主イエス様から遠ざかって自分勝手に思い振舞っていたことの当然の成り行きだと分かります。

そして、今、こうして主日にあなた方と共に御前に集められて、御言葉を聞き、この世を歩まされる苦しみから、あなた方と共に癒され、喜び合うことが出来ますことに、心より感謝の意を表したいと思います。

さて、今の世の歩みは、苦しくはないでしょうか。苦しいでしょう。ヨハネ福音書で主イエス様は私たちクリスチャンのために次のように執り成しの祈りをしてくださいました。「私がお願いするのは、彼らを世から取り除くことではなく、悪いものから守って下さることです」私たちは、この世の歩みから取り除かれることはありません。そして、たとえ大きな苦しみを抱えていたとしても、主イエス様はいつも、私たちを祝福して、悪いものから守って下さり、この世の旅路を続けさせてくださるのです。

今日の聖書箇所でパウロはこの世における肉の暮らしについて述べています。パウロはよく肉という言葉を用いますが、それは私たちの存在を霊肉と分けた時の肉の部分を指しています。例えば、フィリピの信徒への手紙では３章３節から出て来ます。「私たちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです」とあります。肉の部分には、私たちのこの肉体、所有物、肉による家族、利害関係などが含まれるでしょう。

私たちのこの世の歩みにおける苦しみは、こういった肉的なものへの執着によってもたらされるのではないでしょうか。私たちクリスチャンは、主イエス様の救いを確信し、霊的に生かされることで、永遠の喜びを得て、永遠の命に入れられることを確信しています。それは唯一、主イエス様にすがって歩むことによってもたらされることを私たちは確信しています。それでもなお、私たちは、この世の歩みにおける苦しみから逃れることが出来ません。それは私たちの肉的なるものへの執着心によってもたらされるのです。

肉的なものへの執着心の例として、金銭欲を考えてみましょう。今の世の秩序は、多くの部分が、貨幣制度によって保たれています。例えば、年金制度というのは私たちの人生にとって不可欠のものとして認められ、その制度によって私たちは安心して暮らしていくことが出来るでしょう。しかし、この年金制度を維持していくには、ある意味驚くべき完璧な、記録とお金の制度が前提として必要です。つまり、一人一人が若いころに働いた記録が完璧に数十年後まで残っていて、その記録を基に、年老いた自分にお金が支払われるという制度です。その制度がいいとか悪いとかいうつもりはありませんが、少なくともそういった記録とお金の制度を、この世の中が維持していくためには、私たちはその制度に対して献身していかなくてはなりません。そんな中で金銭欲が芽生え、金銭欲に支配されてしまうということも起こりうるでしょう。

最近、Go　toトラベルというキャンペーンが打ち出されましたが、このキャンペーンは私たちがこのコロナ渦中においても、現行の貨幣制度にとどまりうるかということを試す試金石になりました。ただ金銭的な割引があるというだけで、我々が旅行に出かけようと決断する動機付けになるのかが試されたように思います。旅に出かけようと思う動機には、様々あるかと思いますが、例えば聖書では、年老いたヤコブが息子ヨセフがエジプトで、まだ生きていたことを知って「私は、行こう、死ぬ前にどうしても会いたい」といってヨセフに会いにエジプトへ旅立ちました。これなどは旅行に出かけるとても分かりやすい動機だと思います。

私たちは、今この世にあって、ヤコブのような素直で分かりやすい動機付けと、完璧かつ珍妙な金融的動機付けの間で揺れ動いているといってもよいでしょう。

さて、本日の聖書箇所でもパウロに対したフィリピの信徒たちは、揺れ動いておりました。それはパウロに対して心づかいの贈り物を送ろうか、送るまいかということでした。８月２日の説教で、私たちクリスチャンは洗礼を受けて「行いの法則」で生きる者から、「恵みの法則」で生かされる者へと変えられた、或いは変えられつつあるというお話をしましたが、贈り物を送ろうか送るまいかという迷いは「行いの法則」と、「恵みの法則」の間の揺れ動きだともいえましょう。「行いの法則」に縛られがちな人々は、どうしても、贈り物をして見返りを求めがちになり、「恵みの法則」に生かされる人々は、贈り物によってただ恵みを増やされます。私たちはこの両者の間を揺れ動いているのです。

「行いの法則」と、「恵みの法則」の間を揺れ動くということは必ずしも悪い事ではありません。むしろ必要なことだと思います。私たちは「行いの法則」と、「恵みの法則」との板挟みにされながら、共に苦しみ、そして着実に肉的なものへの執着から脱して、霊的なものへと変えられていっているといえるからです。

パウロもそのことを証しています。１１節「物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。」パウロは肉的に生きることも知っていますし、霊的に生きることも知っています。そして自身が、だんだんと肉的なものから霊的なものへと変えられたことを、習い覚えたという言葉で言い表しています。習い覚えるということは将に私たちが神の子として行っていくべき姿勢ではないでしょうか。幼い子供たちは心と体が一つになって、多くのことに体当たりで臨み、そうしてよいことを習い覚えていくのです。その姿勢は、今の世で、年を重ねた私たち神の子にとっても不可欠な姿勢でありましょう。幼い子供は自分の賢さを誇りませんが、私たちは、自分の経て来た成功体験などから、どうしても自分の手柄や賢さを誇ってしまうという罪に陥りがちです。しかし、今や、私たち人間の賢さや成功体験は、私たちを完璧かつ珍妙な状況へといざなうものであることが明らかになってまいりました。

「貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。」

私たちは、今までフィリピの信徒たちへの手紙を読んできて、何回も「喜びなさい」「喜びなさい」と勧められました。それは変わることのない同じ喜びのことでした。世の中にあふれているノスタルジックな喜びでもなければ、見せつける喜びでもありません。パウロが貧しく暮らしているときも、豊かに暮らしているときも抱いていた同じ喜びとは、何でしょうか。それは、具体的な例を挙げれば10節に記されている、心づかいの贈り物をついに受け取ったときの、非常な喜びに他なりません。贈り物もわいろとして使われるならば、その喜びはやがて確実に憎しみへと変化することでしょう。しかし、もし私たちがこの世の贈り物を精一杯「恵みの法則」に生かされながら送る時、それは、私たちの間で大いなる非常な喜びとなって、いつまでも消えることはないでしょう。パウロはそのような喜びを得る秘訣を、キリストによって、習い覚えたのです。

私たちは今日の聖書箇所で、パウロのこの世での実際の生活に思いを巡らすことによって、霊的なことと、肉的なものとが切り離された存在でなく、それらはすぐ隣り合わせの処にあって、私たちは、この世の歩みを霊肉一体となって歩まされていることを知らされます。

思い返せば、今までの説教で、喜びは悲しみのすぐ近くにあり、平和は恐怖のすぐ近くにあり、そして霊的なものは肉的なもののすぐ近くにあるといって来ました。そして喜びを悲しみに、恐怖を平和に、肉的なものを霊的なものへと変えられるのは、私たちのすぐ近くに居られる主イエス様御自身に他なりませんでした。キリストと共に歩んできたパウロはそのことを十分に習い覚えて、１３節で「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」といって主イエス様をほめたたえています。私たちは、主イエス様とすぐ近くにいて共に歩むとき、**私たちが**なすべきことを知らされるのです。

実のところこの手紙を牢獄の中で書いている、パウロの肉的な生活は、悲しみと恐怖に満ちたものではなかったでしょうか。しかしパウロは、それに絶望することなく、むしろそれを喜びと悲しみに変える秘訣を習い覚えていたのでした。その秘訣とは、常に主イエス様とともにいるということでした。

考えて見ますれば、私たちのこの世での今の肉体も、やがてなくなってしまう、ということを前に私たちは恐怖と悲しみを覚えることもあるでしょう。しかし、そばにいます主イエス様がすぐに、それを非常な喜びと、神の平和へと変えてくださることを私たちは確信しています。そればかりではありません、私たちは、貧しい時も豊かな時も、その時々に、聖霊なる神の導きによって、主イエス様のために私たちが実際になすべきことが知らされます。それは、聖なるかな聖なるかなと叫びながら大げさに、行うべきことだけではありません。むしろ、この贈り物、贈ろうか贈らまいかといったような、細やかな心づかいのうちに、聖なる非常な喜びは実現されていくのです。

私たちのうちにもたらされる神の国への道のりも、そのようなこの世の肉的な生活の繰り返しの先につながっているのです。

お祈りいたします

天の父なる神よ、今日は御前にこの兄弟姉妹を集められ共にも言葉を聞き、あなたを礼拝賛美出来ますことに感謝いたします。

今日はパウロの口を通して、この世の処世術ともいうべきことを聞きました。どうか私たちがあなたに寄り頼みつつ、貧しい時も豊かな時もあなたの栄光を現わしていくことが出来ますように。あなたから習い覚えた秘訣が、口づてに伝えられ増々世の人に知られて行きますよう、御力をお与えください。

主よ、わたしたちが今抱かされています恐れと不安の中にあって、私たちがいたずらに事を行うのでなく、静かにあなたに祈る時をお与えください。私たちの旅路が初めから終わりまで、あなたによって導かれ、その一歩一歩があなたの祝福によって守られていますことを私たちに悟らせて下さい。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます、私たちの救い主イエスキリストのみ名によってお願いいたします。